

子どもと保育の情景 (15)

ほんの小さなかわりの中に

戸田 雅美

四月に幼稚園に入った三歳児も、十一月になると、それぞれに好きな遊びがあり、幼稚園の生活は楽しいという雰囲気があふれていた。クラスで集まって、絵本を見たりするときも、毎日の生活の中でその楽しさもわかってきているらしく、自然と静かになった。先生がおおかみになっての「おおかみと子やぎごっこ」も、担任の、真に迫りながらも楽しそうなおおかみに向かって、一人ひとりがすっかり子やぎになりきって、「がらがら声だ」「声が違うよ」「かぎ、あけちゃだめ」などと言いつけている。はじめは「一人ひとり」の思いの表現に過ぎなかったものが、いつの間にか、表現が重なり合い、またそれぞれの高まった気持

ちが重なり合って、「みんな」の楽しみになっていく姿も見られていた。

そんな保育の一日も終わりに近づき、お帰りの時間、この日は、二人ずつ手をつないで並んで帰ろうということになった。子どもたちは、帰りの支度を終えると、パートナーを見つけ、次々と並んで列になって待っていた。ところが、ゆうかは、少し支度が遅かったためか、一人になってしまった。

ゆうかは、列を見ながらうろろうろしていたのだが、三歳児の子どもたちは、自分が手をつないで並んだことに満足しているのか、ゆうかが困っていることに気がつかない様子だった。しばらくすると、ゆうか

は、列の後ろの方に並んでいたみさきとちなの方に近づいていった。そして、そこでも、ゆうかは、しばらく躊躇しているようだったが、黙って、みさきの手を取った。

みさきは、いきなり手を取られてびっくりしたのか、その手をさっと引つ込めた。ゆうかが困ったようにみさきを見ていたが、みさきは、ゆうかを見ながら手を引つ込めたままだった。

ちょうど担任はその場を離れていたの、私は、みさきにゆうかの思いを伝えようかと迷って見ていた。みさきが、手を引つ込めたのは、どうしてだろう。急に手を取られてびっくりしたからだろうか、それとも、三人でつないではいけないことになっているのだろうか……。でも、よく見てみると、列の前の方には三人でつないでうれしそうにしている男の子たちがいる。

すると、ゆうかは、列の後ろをぐるりと回って、ち

なの横に並ぶと、今度は、ちなの手を取った。ちなは、みさきの方に身体を寄せて、ゆうかから離れるようにしながら、ゆうかがつかもうとした手を自分の身体にぐっと引き寄せた。ゆうかは、しばらく、その様子をじっと見て立ち尽くしていたが、気を取り直したように、再び列の後ろを回って、みさきの横に身体を寄せると、みさきの手をつかんで、手をつないでしまった。

しかし、今度はみさきが、明確に「いや！」というように手を振りほどいて、手を自分の背中に隠してしまった。その様子をちなも見ていて、みさきの身体をちなの方に引き寄せるようにした。

最初は、急なことにびっくりして、手を引つ込めてしまっただけだったのかも知れないが、二人が、同じ経験をして、同じように動いているうちに、同じ気持ち重なって、「私たち二人だけで手をつなぎたいんだもん」というような共通の気持ちで二人に生まれて

しまったようにも見えた。私は見えていながら、迷っていて何もできずにいたことを後悔した。本当は、二人には、ゆうかを拒否する気持ちが明確にあったわけではなかったのに、私の躊躇が、そんな関係を生み出させてしまったように感じて、「ゆうかちゃん、私と手をつなごうか」と誘ってみた。

ところが、ゆうかは、首を振って、担任に助けを求めに行ってしまった。ゆうかも友達と手をつなぎたいのだろう。ましてや、今日初めて会った大人である私では満足できないのは当然であろう。

間もなく、担任と手をつないでゆうかが戻ってきた。ゆうかが、迷わずみさきのそばに行き、手をつなごうとすると、さつきと同じくみさきは手を隠す。担任は、「ゆうかちゃん一人になっちゃたの。みさきちゃん、つないでくれない?」と聞くが、首を振る。「じゃ、ちなちゃんは?」と聞くが、こちらも首を振って、ますます二人の気持ちは「二人であること」



に固まってしまったようである。

すると、担任は、「そっか、みさきちゃんとなちゃん、今日は二人でつなぎたいのか?」というのと、二人は少しほっとしたように表情が緩む。気がつくくと、周りの子どもたちが、担任のしていることや言葉に注目している。担任は、今度は、その子どもたちの方を見て、「ゆうかちゃんが、一人になって困っているんだけど、だれか、『ゆうかちゃんおいで、手をつなごう』っていう人いないかな? ねえ、ゆうかちゃん

ん」と話しかける。すると、六、七人の子どもがさつと手を差し出し「ゆうかちゃんおいで」と口々に呼びかけた。

ゆうかは、今度は、思いがけずいろいろな子どもたちから誘われて、戸惑ったような表情をしていたが、一番近くにいたとくまの手を取って列に入った。担任は、「ゆうかちゃん、みんなに呼んでもらって、『どこに入ろうかな』って困ってたねえ。困っちゃうくらい、みんなが『ゆうかちゃん！おいでよ！』って言ってくれたねえ」と言い、ゆうかとはかの子どもたちを見て笑った。その言葉に、みんなが笑い、ゆうかもみんなの笑いに引き込まれたように笑顔になった。見ると、みさきとちなもうれしそうな笑顔だった。

「みんなと仲良く」と大人は願う。しかし、三歳くらいの子どもにとっては、みんなよりも前に、自分の気持ちが大切なのは当然のことである。また、手を引っ

込める行為は、ともすると、いかにも意地悪な感じにも見えてしまう。けれども、ゆうかが嫌いだから意地悪をしてやろうという意図があつての行為というよりは、びっくりして偶然してしまった行為に、いつの間にか、自分自身の気持ちが悪き込まれてしまうということも多い。

「みんなと仲良くしなさい」「意地悪はいけない」と注意することは簡単なことだが、そもそも、このくらいの子どもたちは「みんなと仲良く暮らす」とはどんなことなのか、一つひとつの状況の中ではわかっていない。みんなで仲良くすることの心地よさやどうしたらそれが実現できるか、自分の思いと両立できる工夫があるのだということを知ることが、人として生きていくための力となる。

担任のほんの小さなかわりの中に、そんな保育を見たような気がした。

(東京家政大学)